

古道が石内に入った所は、五日市インターの北側、今の県道と同じ所で、そこから団地の中を下り、山陽自動車道の南に沿って尾根を越えて行くと、やがて石仏が見えて来る。



石仏



今市城跡



浄土寺

この石仏は、高さ九〇センチメートルの自然石で、文字は刻まれていない。見る方向により、人や猿あるいはおばあさんが子どもを抱いている姿にも見える。なお、千人斬りの供養塔とも伝えられているが、定かではない。また、いつごろ誰がここに設置したかも不明である。ここは、五本の道の交叉点に位置し、昭和のはじめ頃までは、神原方面への郵便配達や人の往来のための峠越え道の分岐点として重要な位置をしめていた。この付近は、山陽自動車道の建設とともにあって地形が大きく変わっているが、この石仏のあるところは、昔の古道のおもかげを残している。

古道は、しばらく山陽自動車道と同じルートをたどった後、今市城へと向かう。今市城跡は、石内平野に突き出た尾根を利用した城で、谷をへだててある串山城とともに源平合戦の時、平家の方の城であったという。山林におおわれた城跡に入つてみると、本丸・一の丸・三の丸の跡らしい人工的な地形がかすかに残り、その背後の北側には、空堀の跡が見える（『五日市町誌』）。

今市城跡を左に見ながら下り、石鎧神社のある丘を登り、境内を通り、山裾をしばらく行くと浄土寺が見えてくる。この寺は、もと真言宗で、平岩山教専坊と称していた。開基年代は、定かでない。天文十一年（一五四二）に真言宗から浄土真宗に改宗し、寺号を平岩山浄土寺とした。戦国時代の天文年間に、水晶ヶ城主麻生右衛門が菩提寺とし、その子於菟丸（法名 道昧）を住職とした。本尊は阿弥陀如来である（『五日市町誌』）。なお、今の住職は、道昧から数えて十八代目である。この浄土寺の境内には、石内村で最初の小学校といわれる形成館があつたらしい。『五日市町誌』には、字教場四六二七、教員一名、生徒男七七名、女一一名、校舎



瑠璃光水跡から淨安寺の大イチョウをみる



瑠璃光水跡

新築と記されているが、現在、境内には建物の跡など残っていない。形成館と言うのは、通信簿に出てくる名称で、形成館の存続は、明治初期の一、二、三年の短い間だったらしい。ここからしばらく行くと川があり、更に行くと石内小学校横の山裾を通って、石内公民館前で県道に合流する。県道を少し行くと右手から合流する道があり、そこを少し入った所の道路の隅に「瑠璃光水跡」と言う金属の標識板が埋められている。瑠璃光水とは、その昔、淨安寺の仏像が盗まれ放置されていたのを村人が見つけ出し、その汚れた仏像を洗い清めた池である。また、「この池は、瑠璃光色をしており、この水は難病・眼病を治すことが出来た。」という伝説が残っている。昭和五十年に埋められるまでは、生活用水として利用されていた。なお、この伝説は、淨安寺薬師如来像の体内から発見された木札（宝暦五年（一七五五）の仏像修理の時に入れられたもので、薬師如来像の縁起などを記している。）に、前記の言い伝えとは多少異なるが記されている（『五日市町誌』）。

県道を少し行くと前方に銀杏の大木があり、ここに、淨安寺薬師如来像が安置されている淨安寺薬師堂がある。淨安寺（萬正山門前院淨安寺）は、旅人や地元の者の安全や病気の回復を願うために建てられた寺であるといふ。多くの伽藍が立ちならんでいたと伝えられているが、成立年代は不詳、宗派も不明である。薬師如来は、「目薬師さん」と言われ、近郷に知れ渡り信仰されていたらしい。像高八五センチメートル、桧木寄せ木造の像で今は、一間四方の堂に安置されている。行基菩薩の作と言い伝えられるが開基年代は不明である。平安後期の作ではないかと推定されている（『五日市町誌』）。なお、薬師如来は、平成元年（一九八九）に広島県の重要な文化財に指定されている。

県道をしばらく行くと正面に大木の生い茂る白山八幡神社、左手には、有井城跡が石内川をはさんで白山八幡神社と向かいあつてある。白山八幡神社は、境内のうつそうたる大木群の中に本殿・舞殿・幣殿・相殿・



有井城跡



白山八幡神社

稻荷などが位置している。祭神は、神功皇后・応神天皇・仲哀天皇であり、由緒は、今から一二〇〇年前の延暦二年（七八三）豊前国宇佐八幡宮から勧請したものと伝えられる。当神社には、その由緒を記した白山八幡宮掲額をはじめ、石神門の由来を書いた木札、社殿再建の棟札〔寛文三年（一六六三）、文化十一年（一八一四）〕が残っている。

現在地に社殿が造営されたのは、天文十年頃といわれる。水晶ヶ城主である大内氏家臣麻生鎮里が当社を信仰し当地に社殿を造営したということである。明治四十一年（一九〇八）に、村内にあった「九社（三九の祭神）を合祀し、村社（石内村総氏神）となつた。

白山八幡神社の鳥居をくぐつて県道に出ると、石内川の向こうに凸型をした小山の有井城跡が見える。有井城跡とは、土地の人が「まるこ山」と呼んでいる、標高五二・八メートルの中世の山城の跡である。この地は、もとは背後と尾根続きになっていたが、尾根を掘りきつて独立の小丘状にして城が築かれたといわれている。頂上まで三段に分かれ（水田面を基準にして）その二段目に館があつたと考えられる。「有井城は、元南朝の忠臣有井三郎左衛門尉の築きしものにて、後山県備前守居城たり」と「佐伯郡誌」は記している（『五日市町誌』）。近くには、有井家・有井池・有井神社がある。

白山八幡神社前の県道は、こののちしばらく山裾を通るがこの山には、戦国時代（一六世紀）には、「石道本城」（石道とは、石内以前の呼び名）あるいは「本城」と記され（『房鏡覚書』、『国郡志下通帳』）江戸時代の『芸藩通志』に「水晶（すいし）城」と記された水晶ヶ城跡がある。

水晶ヶ城跡の地名の由来は、城跡の山から水晶がとれたことからと思われる。実際、今でも白山八幡神社との間で水晶が出ている。初代城主は、源範頼の家臣佐々木国正といわれ、十二世紀前半の源平合戦時代、ここに城が築かれ平家の今市城や串山城と戦つたといわれる。その後戦国時代の天文十年（一五四二）頃には、大内義隆の家臣麻生鎮里が城主



百石



迫口觀音を下からみる

となり、天文二十三年の毛利氏と陶晴賢との合戦の時に毛利方の城となつたが、それ以後、文献にあらわれず廢城となつたらしい（『石内村郷土誌』）。現在、館跡・本丸・二の丸・三の丸・出丸・空堀・土壘・馬場などの跡と思われるものが確認されている。また、この城に水を引いた溝跡が山道となつて残つている。

しばらく行くと古道は、県道と分かれ山道に入り西へと向かう。この途中の尾根の先端に迫口觀音が見える。迫口觀音は、道路から石段で約八メートル登つた、見晴らしいのいい尾根にある一間四方のお堂である。その中に首の折れたお地蔵さんが安置されている。もともとは、現在位置のすぐ下にあつたが、昭和九年頃、今の場所に移された。この地域の風習では、嫁取りの際、お堂の中のお地蔵さんが運ばれ、嫁が赤いよだれかけを作つて返していた。そのやりとりの時に首が折れてしまつたとのことである。地域の人々からは、厄除けとして拝まれている。その後、山道を出た古道は、しばらく北上した後、川を渡り山裾沿いに平地を大さく迂回しながら南下して行く。

古道に沿つて山裾を歩いて行くと、平地の中にグリーンのネットを張つた高台が見えてくる。その高台に、亀山新宮神社跡（亀山神宮大明神とも言ふ）がある。明治四十一年（一九〇八）白山神社に合祀されたが、それまでは村社であった。現在、白山神社の正殿に、貴船神社・松丸神社・有井神社の祭神とともに祀られている。なお、本殿の建物は、白山神社の境内に移築されている。現在、神社跡地の亀山は削られてグランドになっている（『五日市町誌』）。

古道は、家々の間を抜けながら県道へと向うが、このあたりに、百石（ひやくいし）と言う小字（こあざ）がある。百石とは、古くこの付近まで海が入り込み、石内川を渡るため数百の飛び石があつたことによる。石内村から浅野藩に出した文政二年（一八二〇）の古文書に「往古当村の郷中よりしもは入江で潮満込み、これに注ぐ川幅広く、渡るに数百の飛石



徳美城跡



浄徳寺

あり、為に怪我人等出て石仏を建つ。この石仏は、今もあり、このあたりの地名を「百石と呼ぶ」と記されている。現在、県道と石内川の間に案内板とともに飛び石の一部と考えられる石がある(『五日市町誌』)。古道が県道と合流する少してまえの山裾に、ひつそりとしたなかも桜の大木が目をひく浄徳寺がある。県道にある案内の石柱には、教徳寺と記されている。お堂の額には、「徳美山」としか書いてないが、この境内付近の小字は浄徳寺である。お堂は火事に会い、文化五年(一八〇八)に再建されたものである。本尊は觀世音菩薩で、現在のものは盜難でなくなつた旧本尊(行基の作と伝えられていた)に代つて新しくつくられたものである。さらに、現在、お湯が湧き出でていたという伝えのある井戸も残つている。

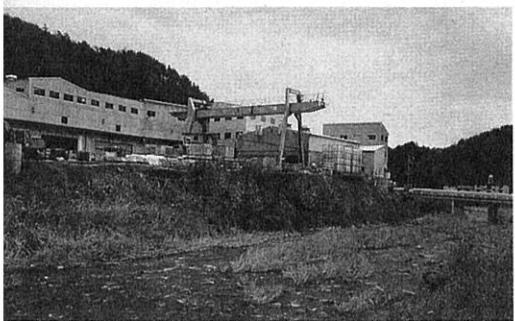
浄徳寺から南へ一〇〇メートル下つた尾根に戦国時代の城跡がある。その城跡は、『五日市町誌』には、長尾城の南西七五〇メートル、高さ約一六一メートルの山で、城主は不明である。しかし、石内に住んでいる人は、この尾根の先端(高さ六一・六メートル)を徳美城と呼んでおり、この尾根は、下から見ても、実際に登つて見ても、人工的に切り取った跡がはつきりと見られる。郷土史家も、徳美城の位置は、約一六一メートルの山ではなく、六一・六メートルの尾根の方ではないかと言つてゐる。

県道をしばらく行くと法専寺が見えてくる。法専寺は、もと龜石山慶雲寺(きじやくさんきょうううんじ)と言つう禪寺であった。その後、浄土真宗に改宗、和田利松(としまつ)へ移り、本願寺から寺号を受け、龜石山法専寺となつた。現在地に移つたのは、明治十年である。本堂は、明治十八年に再建されたが、その時の棟梁は、映画監督の新藤兼人の祖父伊佐衛門だつたという。本尊は、阿弥陀如来である。また、この法専寺の裏山には、お地蔵さんと碑がひつそりと立つてゐる。

そのお地蔵さんは、日本廻国記念奉納地蔵で、寛延三年(一七五二)に利松村の僧教譽智真が「実譽淨土大德」をめざして廻国巡礼した記念



宮尾城跡



広島綿糸紡績小深川工場跡



日本回國記念奉納地蔵

30

に奉納したものらしい。巡礼者としては、法専寺の前身の慶雲寺に関する僧が位を上げるために廻ったのではないかといわれている。その後古道は三和中学校裏の山林を抜け、三和橋で八幡川を渡り、山裾沿いの道を保井田へと向かう。

宮尾城跡は、三和中学校裏の山にある。『芸藩通志』には、滝尾の城元文二年（一七三七）の「芸備故城志」には、「利松孫右衛門某所居」と記されている。

三和橋から八幡川沿いに六〇〇メートルさかのぼった所には、広島綿糸紡績小深川（こぶかわ）工場跡がある。工場ができた当時（明治十六年広島綿糸紡績会社として操業開始は、最新鋭の工場として周囲の目を驚かせたらしい。敷地約一〇〇〇〇平方メートル（一町四畝一二歩）、紡績機械はイゼリス製で三〇〇〇錘、動力用水車は、四五馬力であった。明治四十二年には、女工一〇〇名の規模で、工場周辺の川坂地区には、宿屋・飲食店・雜貨店が並び川坂町と呼ばれ繁榮したという。その後 山積綿行株式会社として操業するが、大正十一年には紡績工場としての歴史を閉じる。跡地は現在、大理石の工場や社宅となっている（『小深川工場跡調査報告書』）。

大町駅は、十世紀初めにつくられた「延喜式」に出てくるが、その記在については、広島市安古市町大町にあったと言う説もありはつきりしない。しかし、利松の新幹線高架橋付近には、東都・郡佐古・郡越・郡・北郡の小字があり、かつてこの付近に佐伯郡の郡家が置かれていたようにも思われる。この付近は東の伴部（とも）駅と西の種籠（へら）駅のほぼ中間にあり、また地理的に見ても、交通の要衝であつたと思われるこれら、大町駅は利松付近にあつた可能性も十分に考えられる（『五日市町誌』）。